

水土里レポート 投稿様式

投稿月日	令和4年7月28日
タイトル	校庭のミニ畑に「くわい」を植えたよ！
水土里レポーター名	水土里ネット福山 佐々田 愛

令和4年7月8日（金）福山市立川口小学校5年生がくわい植付けの農業体験をしたので取材しました。

福山市立川口小学校5年生は、生産量日本一の「くわい」を小学校で栽培し、環境、歴史、食文化など多方面について学ぶことで、郷土の農業に関心を深めることを目的とした学習に取り組んでおられます。

川口小学校の校庭にある特製くわい畑で子ども達がくわい植付けをすることになり、新型コロナウイルス感染症感染防止対策をし取材をしました。

5年生3クラス87名全員が校庭に集まりました。初めに、水土里ネット組合員でくわい生産者の坂本恵昭さんが、子ども達が事前に調べて感じた疑問点について答えてくださいました。

「くわいの種類は青くわい、白くわい、吹田くわいの3種類あり、福山では青くわいが生産されている。」

「全国約30か所で生産され、1番多い生産地は福山で、2番目は埼玉県越谷市、福山の生産量が全体の6割を占めている。」と説明されました。

続いて、くわいの苗を持って、植付けの方法を説明されました。くわいは芽と根がよく伸びており植えた後、根がよく水や栄養分を吸収するように根元を2～3センチほど残して先の方をハサミで切りました。苗を植えるのは初めての子どもばかりで、「鉛筆を持つように苗を持って土の中にしっかり入れ、周りに土をのせて植えた苗がぷかぷか浮いてこないようにしましょう。」と分かりやすく説明されました。



みんな苗を持ち真剣に話を聞いています！

芽がよく伸びた苗は植えやすいようです！

子ども達が水を張った畑へ裸足で入り、素手で土の中を手探りで植えていきます。みんな初めてなのにしっかりと足取りで自分が植える場所に進み友だちと「こんな感じかな。」と顔を見合わせたり、先生に教えてもらいながら上手に植えていました。しっかり土の中に植えることができたので、水面からくわいの芽がピンと伸びて倒れたり浮いたりした苗が一つもありませんでした。

植付けをした子は畑からあがり水道水をホースでかけてもらいながら手足を洗いました。子ども達の人数より多めに苗を準備して下さっていたので、隙間をみつけて全ての苗を植付けしました。

植付けが終わり子ども達に感想を聞いたところ、「田んぼのような土の中に入るのは初めてで最初はこけるかと思ったけど、土の感触がヌルヌルして気持ちよかった。」「植付けしてみて農家の方の大変さがわかった。農家の方はこの何十倍も広いところを手で植えるなんて大変！」「これから収穫までしっかりと水をやって育てたい。どんな風に大きくなるのかな。」と、くわいを植えた喜びとこれから自分たちがくわいを育てるという意気込みを感じました。



校庭のくわい畑は昨年病気が発生し、一旦は今年の植付けを断念しておられましたが、福山市農協福山グリーンセンターの職員の方とくわい生産者の方が協力し土壌改良や消毒をされたことで水が澄みヤゴがスイスイ泳いでいるほどきれいになりました。

協力された農協職員、生産者のみなさんは、子ども達が一生懸命くわいを植える様子を嬉しそうに見守っておられました。

生産者の光成哲至さんは、子どもの頃川口小学校に通っており当時のくわい畑は池で、亀を飼っていたこと懐かしんでおられました。

地域の特産物のくわいを通じて、世代を超えた交流ができていると思いました。

くわいは水田をそのまま利用して栽培することができ、すぐに稲作に戻すことができます。約60年前から川口小学校のある川口町周辺で水田を利用し、くわい栽培が盛んになりました。

今は宅地化が進み子ども達は農業が身近なものではなくなりましたが、学校でくわい栽培を通して直接肌での感触を感じることや食物を栽培する大変さなどを体験することができ、農業を身近なものに感じてくれることと思います。

水土里ネット福山は、引き続き農業体験に協力することで21世紀土地改良区創造運動に取り組んでまいります。